

第二期 第四十五号 (三版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2020.04.20 定有堂書店 発行

読書の彼方へ

夫婦で「失業園鍋」を食す

奈良 敏行

続・滅亡の永久

萩原 俊郎

中学生の家庭学習、オススメの教材

吉田 海将

積ん読

鳥居 貴彦

八代日記 (一)

齊藤 仁昭

シヴァ神の踊り ～時は存在するの～

芝野 浩貴

消えゆくお店

ムラカミヒロシ

二月の客、そしてコロナ

山本千津子

鳥取あれこれ その四十四

内田 克彦

ひそやかな声 ～ビターマイヤアの研

秦阜 梅林

読むという旅

古賀 啓三

マリアーージュ

あきの素生

黒ときどき青赤

ドラメリア

…… 編集後記



読書の彼方に

奈良 敏行

(定有堂 店主)

二月来のコロナウイルス不安がつづき、人込みを避ける気遣いで、街は閑散としている。定有堂は日頃から閑散としているので、閉じこもるためにも本が不可欠という人たちの、しばし貴重な避難所かも知れない。

二十二日、日曜でまだ寝床にいたのだが、一年前まで鳥取にいた萱原健一さんからメールがあった。「電話してもいい？」という内容で、『彼岸の図書館』夕書房の著者青木真兵・海青子さんが、昨日から鳥取に入っている。今日立ち寄るかもしれないというお知らせだった。取材テリトリの奈良県内で懇意になったそう。刊行直後神保町の三省堂で購入し感銘を受けた本だった。

日曜で十二時開店の予定だったが、十時過ぎに到着される様子だったので、あわてて朝食を済ませ、十時十五

分に開店できた。

とても知的なお二人ですてきだった。昨日は松崎の本屋「汽水空港」に招かれ講演をされたと知った。萱原さん（毎日新聞記者）が、わたしに出会いを作ってくださる為に、寄り道をお願いしてくださった様子だ。もの静かで目に力のあるお二人だった。自宅を開き「人文系私設図書館ルチャ・リプロ」を開設されているので有名だ。

松崎の「汽水空港」はクルマで一時間弱。ときどき訪ねて刺激を得ている。ゲストハウスや湖に面したカフェなどで集合体を形成している一角だ。「スモールハウス」そして「オフグリッド」に関心を寄せていたわたしに、同じ松崎の小原修治さんが、この本屋の本棚で「セルフビルド」へと概念をつないでくれたこともあった。一年考え、セルフビルドは軸足が設計者にあるので、少し違うといまは考えるようになった。

汽水空港に招かれた人たちは、ご主人森さんのご厚意もあつて帰りによく定有堂にも立ち寄ってください。『パイトやめる学校』タバックスの山下陽光さん・編集者の大河久典さんもそうだ。「音信不通」寄稿者のワクサカソウヘイさんとの対談の後だった。高円寺のかつての「素人の乱」のドキュメント映画を小原さんにお見せいただいた直後だったので、会えてうれしかった。

小原修治さんは、「奈良さんはワクサカさんの『ふざ

ける力』コアマガジンをすごく評価しているけどどうして？」と先日メールでお尋ねになった。

ワクサカさんは、著書が十点ほどある、中堅の多才な著作者だ。定有堂では入口フロントに特設コーナーを設けている。すごい待遇だねとみんなが言うが、少し違う。定有堂は学び系の品揃えをうたっているが、異色なので置き場がないのだ。定有堂に置き場がない、というのがワクサカさんの底力だ。どんな力かというところ「ふざける力」だ。店内には繁栄を願って招き猫を各所に見え隠れさせているが、ワクサカ本も同様の縁起ものかもしれない。結果を切り崩すマグマのような存在だ。

最近『教養の書』筑摩書房を読んだ。ポップに「リベラル・アーツ第一人者・鬼才」と書いた。戸田山和久さんは『論文の教室』NHKのカリスマ的な仕事で敬愛している。同じころ『勉強の哲学』千葉雅也も文春文庫に入り、合わせて読んだ。ここでいう「教養」と定有堂の「学び系」は重なるのかなという問いを持ったからだ。「系」という尻尾の煮え切らなさをやはり別ものだった。日常の枠組みから自由になるために読書をしようというところは同じだが、学びの「枠」に導引されそうなのが違和感だった。「ふざける力」の方が生きる力だ。市井の学びは日常に帰る必要がある。

「読書の彼方に」というのは、ふと『根源の彼方に』

という本を思い出したからだ。ルソーに興味があった頃
読んだ本だ。根源の彼方にあるものは表層だ。読書は、
ルソーのように根源をめざす。しかし市井の学びは日常
に還る。読書が「力」でなければ意味がない。最近、毎
日一冊ペースで読書し、若くして命を絶った人の事を知
り、読書の彼方に思いをはせている。結論はまだ出ない。

2020.03.22

青木真兵・海青子『彼岸の図書館 ぼくたちの「移住」のかた
ち』夕書房 2019

山下陽光『バイトやめる学校』タバックス 2017

大河久典編集本 Ⅱ 大井美『ローカルブックストアである 福

岡ブックスキューブリック』晶文社 2017

ワクサカソウヘイ『ぶざける力』コアマガジン 2015

戸田山和久『論文の教室 新版』NHK出版 2012

戸田山和久『教養の書』筑摩書房 2020

千葉雅也『勉強の哲学 増補版』文春文庫 2020

ジャック・デリダ『根源の彼方に グラマトロジーについて 上

下』現代思潮新社 1972

二階堂奥歯『八脚の蝶』河出文庫 2020

●本の紹介 (一寄贈いただきました。奈良)

『通訳翻訳研究』No.19(2019) 第19号』

日本通訳翻訳学会 2020.03.25

寺小屋教室にて師事した柳父章さんとのご縁で拝受。日本通訳
翻訳学会の大会「プレ・カンファレンス講義―知の継承プロジェクト」
で柳父章先生の業績を振り返り「未来につなぐ柳父翻訳学」
というシンポジウムが開催され、その報告が含まれている。

芝崎厚士(駒澤大学)「『未知との出会い』としてのグローバル
関係研究序説 柳父章の思想的・理論的意義」。齊藤美野(順
天堂大学)坪井睦子(立教大学)「翻訳語について令和のいま考
える…『国民』成立事情」。南條恵津子(神戸女学院大学)「翻
訳文体の成立…『近代日本語の思想』をめぐって」。

《パネルディスカッション：柳父翻訳学のこれまで・これから》
松永辰郎(元法政大学出版局)「編集者から見た柳父章先生」。
長沼美香子(神戸市外国語大学)「柳父先生から学んだいくつか
のことなど」。水野的(日本通訳翻訳学会前会長)「柳父翻訳学
の可能性」。(司会)田辺希久子(立教大学)。基調報告・北代
美和子(特別企画担当理事)。冒頭朗読(北代さん)の奈良敏行
による寺小屋教室と柳父章についての報告(千字程度)も収録。

夫婦で「失楽園鍋」を食す

萩原 俊郎（倉吉市在住者）

この冬、わが家は毎日が鍋さんまいだった（ま、夕食を作るのは私の役目なので、仕事から帰ってちやちやつと作れるからなのだが）。

和・洋・中、それぞれ世界の鍋にチャレンジしてみたが、その中で「これは美味しい！ わが家の定番に決まり」とうなつたのが、「トマトおでん」と「クレソン鍋」。

「トマトおでん」の方は、「ひよつとして、おでんにトマトの酸味が加わったら、もつと美味くなるのでは」という知的探究心……というか、単なる思い付きからなのだが、つくり方はいたって簡単、仕上げにトマトのホール缶を投入するだけである。追加経費は百円前後。また、冷蔵庫の残り物のキャベツや玉ねぎ、ニンジンや鶏肉などもドサツと入れて煮込むと、なおよろし。つまり、「日本純血のおでんに、外人部隊のトマトポトフが場外乱入してくる」わけですな。ぜひ、お試しあれ。

もう一つ、「クレソン鍋」。これにはいささか前段の説明が必要になる。

少々さびれ感が強くなってきた昨今の倉吉で「明るいニュース」といえば、旧市街地の一角に、新しくワイナリーと地ビール会社が誕生したことだろう。それも同じ通りの並びにある。

倉吉ビールは、Uターンして地域活動をやっているFさんが昔の医院跡に立ち上げた。実は倉吉、キリンビールの創業者のひとり、磯野長蔵の出身地の縁で「一番搾り」の原料となるビール麦を市内で栽培している。初夏には一面、黄金色の「麦秋」の風景が見られる。

倉吉ワイナリーは、京都から移住してきたIさんが起業した。すでに北栄町には北条ワイナリー、近く安藤忠雄設計のワイナリーが琴浦町にもできるそうで、中部はなかなかすごいことになる。

だが、その前に倉吉にはウイスキーの松井酒造（海外のモルトを混ぜているとネットでたかれたが、ウイスキーなんてすぐすぐできるわけがない）が進出、郊外に立派なディスティラリー（蒸留所）を建設した。「メイドイン倉吉のクラフト・ウイスキー」は樽の中で出荷の時をじつと待っている。ここはジーンも製造している。

「わが町にはワイナリーがある」とか「地ビールをつくっている」という町は全国を探せば、ゴマンとあるが、倉吉はワイン、

ウイスキー、ジン、ビール、もともとある日本酒・焼酎を合わせる、およそ酒という酒が全部そろおう町になる。ところが、住民がまことにのんびりしている、まだ、ピンと来ていない。私なら「バツカス(酒の神)に愛された町」と銘打ち大々的にPR、課題である夜の倉吉観光を大いに盛り上げるのだが……いやはや、話がそれてしまった。

倉吉ワイナリーは古い町屋を改装した建物で、雰囲気のあるたずまい。そこに夜の会合で出かける機会があつた。

さまざまなワイン、パテやチーズの前菜、そして登場したのが、あの「クレソン鍋」だった。鴨肉とてんこ盛りの関金産のクレソンをしゃぶしゃぶ風に湯にくぐらせ、つゆにしつかり味のついたところで「しめ」の蕎麦を投入、みんな「うまい、うまい」と夢中ですする。「この鍋、どこかで読んだ覚えがあるなあ……」。ちらりと頭をよぎったが、Iさんは京都出身なので「そうか、鴨南蛮の発想なんだ」と独りごちて、その場合は終わった。

これだけ美味いと家で試したくなる。ホワイトデーに関金の道の駅でクレソンを買った。鴨肉の入手は面倒なので、鶏もも肉で代用。

「なにこれ！ 美味しい」カミさんの反応がうれしい。「京都に住んでいた頃、こんな鍋、食べた気がするけど。そんな

んだ、鴨南蛮なんだ」と彼女も「京都発祥説」に傾く。で、カミさんは鍋の写真を撮ってさっそくフェイスブックとツイッターにアップ。

すると、倉吉駅前でジャズ・バーをやっているミワリンから、さっそく反応があつた。「鴨肉だったら失樂園ですね」。そうだ、思い出した！

かつて一世を風靡した渡辺淳一の不倫小説、大企業の幹部たちがさも日経を読むふりをして役員室でひとり熟読していた『失樂園』。あらためて読み返すと、クレソン鍋は小説のクライマックスに出てくる。つまり、会えばセックスばかりしている(笑)主人公たちが食す「最後の晚餐」なんですね、これが。

もちろん、彼らは「しめ」の蕎麦を入れて「うまい、うまい」とすすったりはしない。高級ワイン、シャトー・マルゴーに青酸カリを入れ、「局所をつなげたまま」心中するのである。ああ、バカバカしい。

ホワイトデーの夜、よりによって夫婦で「不倫鍋」を食してしまつた私たち。しかし、出した結論は、こうである。「こんな美味しいものがあるのに、死ぬるか！」みなさんも、お試しあれ。きっと「失樂園」とは裏腹に、生きる元気が湧いてくるから。

続・減亡の永久

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

前回からの続き。

「紙の本」の永遠性と、「データ」の脆さについて。

いや、その話をする前に。一か月も空くと、本当に色々なことがある。コロナ渦(ついでに言葉を最近覚えた)にじわじわと生活を阻まれていううちに、娘が水疱瘡になってしまった。柔らかいお腹にボツボツができていて、まるで「豆大福」で、妻は勤めがあるので、私が看病をすることに。したがって外出もできず、打ち合わせなどの外出仕事はキャンセルとなり、原稿もままならず、なかなか詰んだ状態に身を置いている現在。月末までにメ切があと四本、うーん、困った。しかしどうすることもできず、発疹だらけの娘と一緒に部屋で時間を漫然と煮ている次第。

でね、こういう時に思う。「ああ、どこかに迷い込みたいな」って。外出できないとなればなるほど、迷子になりたい、

予期などできぬ状況に身を置きたい、自分がいま立脚している構図から逸脱したい、などといった欲求が高まってくる。

先日、個人的に付き合いのある個人経営の本屋に聞いたのだが、コロナ渦において、なんと売り上げが普段の2倍から4倍になったと。これはいつたい、どういうことなのか。おそらくだが、周囲のイベントがバタバタと潰れ、みんな外出先がなくなった、時間を持て余すようになった。で、本屋に足を運ぶようになったのではないか。

本屋に足を運ぶとき、「絶対にこの本を買うんだ！」という目的を持っていることは、少ないように思う。まるで自ら積極的に迷子になるようにして、フラッと入店していたりする。なにかの「未知」と出会ってしまうかもしれない不明感に背中を押されながら、私たちは本屋へと向かう。これってつまり「外出」の本質だ。私たちはなぜ外出するのかというと、予測できない状況に身を置きたいからだ。煮詰まった日常から逸脱を果たしたいからだ。

その外出がマクロに制限された時、ミニマムに外出体験ができる場所である「小さな本屋」に、みんな足を向けるようになった。「売り上げが2倍から4倍」のからくりは、そんなところにあるんじゃないだろうか。迷子になりたいという欲求は、私たちの生活感情の原理原則のようなものなのだと思う。

「紙の本」の強いところは、迷子の人々との出会いを「待つ」ことができる点だ。ずっとずっと、古書になってもなお、顔も知らぬ誰かを待ち続けることができるのが、「紙の本」の尊い利点だ。そしてそこにこそ私は、永遠性を覚えてしまう。

電子書籍だと、こうはいかない。データのテキストは、外出先ではなく、現在立脚している構図の中に並べられている。ネットはあくまで、疑似外出でしかないのだ。迷子になりながら予期せぬ書物に触れる、そんな感覚を電子書籍のゾーンで味わうことは、なかなか難しい。データは滅亡しないので、たとえ迷子の状態で電子書籍に出会ったとしても、「まあ、またこんどでいいか」となってしまうたりする。出会いがしらの衝撃を生む値が薄いのである。

テキストデータが、今後、どんどん台頭してくる世の中になつていくと思う。文筆業を営む身として、もちろんその波に乗ることは楽しんでいきたい。しかし、同時に「紙の本」をつくることも、いままで以上に楽しんでいきたいと思っている。テキストデータばかりに乗っていると、いずれ永遠性を失い、滅亡に巻き込まれてしまう気がしているからだ。流行りの裏には、必ず廃りがべつとりと存在している。

というわけで、まずはNINJAをボコボコ生産する今年にしようと思っている。紙の新刊だつて変わらず出版していきたい。それはつまり、永遠に迷子の誰かを待ちつづける機会をたくさん作ろう、ということでもある。「紙の本」は、私を未知

なる路地から路地へと連れていつてくれるはずである。

これを書いている最中、ずっとスマホで YouTube を見ていた娘が、「もう飽きた。図書館とか行きたい」と言い出した。いいぞ、娘。一緒に迷子になりにいこうぜ。

中学生の家庭学習、オススメの教材

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

コロナ騒動で、地に足がつかない日々が続くが、何も前に進めないわけにはいかない。この原稿を書き終えなると4月は来ない。3月アタマから家に待機している子どもも、すべて放っておくわけにはいかない。特に次男は新年度、中3で受験を控える。コロナが収束していけば、サッカーの練習は週5日、年末まで続くだろう。塾に行かせる選択肢はないし、お金の余裕もない。まして私は単身赴任で帰省するのは月に3日間だけだ。

このような条件の中で、朝日新聞1面に哲学者の鷲田清一氏が連載する「折々のことば」は、便利な教材だ。朝、学校を出る前に家族LINEに、その日の「ことば」の写真を送ってもらう。そして、①「ことば」の意味す

るところ、②それに対する自分の意見を書き込んでもらっている。これに対し、私は会社に着くまでの混み合った電車の中で、適当にコメントする。こんな生活を半年ほど続けている。世の中にあふれる言葉の中から、一日に「つだけ鷲田氏を選ぶ「ことば」の多くは、本をはじめとした優れた文章の中からの抜粋で、生きるヒントにあふれている。それでいて、中学生でも必死に読み取ろうとすれば、学ぶことは少なくない。

最近読んだ、ちくま新書『ことばの教育を問い直す』の中で、荻谷剛彦・オックスフォード大学教授は、「チューリアル」という、同大学の伝統的な個別指導を紹介している。数名の学生に対し教員が、まず大量の著書や課題文献を示す。「地道な『読み、書き、論じる』学習の積み重ねが、批判的思考力を育てることは、何百年もの経験で証明済み」だといい、「だから、これだけITなどが発達した時代にあっても、この手間のかかる教育方法を続けている」という。

平凡な中学生が、いきなりこのような学習が出来るわけではない。ただ、例え抜粋であっても、珠玉の「ことば」に出会うことは、学びのきっかけになるのではないかと考える。

◇

3月に連休をとって帰省した際は、京都・大原在住の

ハーブ研究家、ベニシア・スタンリー・スミスさんのエッセイ集「ベニシアの言葉の宝箱」を使い、英語の学習を試みた。左側にエッセイ、右側に訳文が付き、ベニシアさんがゆかりの地を尋ねるDVD付きだ。

The cherry blossoms tremble in the gentle breeze.

桜の季節につくったベニシアさんの作品は、この一文から始まる。ベニシアさんの詩的な言葉は、京都やその風景、出会った人々への愛情にあふれており、教科書や問題集にのっている多くの英文よりも記憶に残るのではないか。しかも中学レベルの平易な文法で理解が可能だ。簡単に解説した上で、一部を暗唱してもらい、同じように鴨川沿いを歩いてもらった。

実を言うと、私は大学時代、英語英文学科に在席した。必修だった英米詞の講義で、教授は私たちにハードルの高い暗唱を課した。年間を通して教授の前で暗唱を披露する必要があり、私のように単位を落とし、再履修した者も少なくなかった。名簿で頭をはたかれたこともあったが、英語はリズムと抑揚の言語だ、と体感した。この経験があったから、ベニシアさんのエッセイを選んだのだと思う。

私のこだわりは、少しの時間であってもとにかく、一

緒に学ぶこと。そして、市販の教材に頼らず、自分の経験からオリジナルの教材を探すことかな、と思う。

だからだと書いてきたが、定期テストは無視できないので、テスト前には、市販の教科書ワークや、進研ゼミの問題集をやらせている。

鳥飼 玖美子 著、苜谷 夏子 著、苜谷 剛彦 著『こ
とばの教育を問いなおす — 国語・英語の現在と未来』

(筑摩書房)

ベニシア・スタンリー・スミス 著、梶山 正 写真『ベ
ニシアの言葉の宝箱』(世界文化社)

積ん読

鳥居 貴彦

(開風社待賢フックセンター)

なにをやっても正解がわからない。べつにいま始めたことではない。この数年間、ずっとそうだった。でもこの数週間はとくに。わざわざ人をまねくというところが息苦しい。本屋は不要不急だと思ふ。思つてはいてもわからないことは多い。

知った顔のひと、近所のひとがやってくるとほつとする。手にした新聞の切り抜きや「テレビでやってたんやけどねえ」という言葉が意味もなくうれしい。ずっとそうだった。でもこの数週間はとくに。

頭が疲れている。情報が多すぎる。悪い情報が多すぎる。こういうとき、手を動かす人でよかつたな、と思ふ。キヤツカンテキにヒョウロンしたりできない。いつでも単なるプレーヤーでありたい。手を動かす人はただ手を

うごかすのが良いのではないか、と自分に聞いてみる。そうかもね。そうだよ。ずっとそうだ。

二階にしている古本の在庫。なにがということはないのだが限界だということはわかる。どこになにがあるかがわからない。たしかにあるはずの本が見つからない。ずっと前に探していた本がとんでもないところから出てくる。人が通る隙間がない。通るとかならず本が落ちる。本、というよりは山と呼んだほうが正しいのではないかとおもえてくる。限界だ。もうだめだ。

知人と一軒家をシェアすることにした。家賃を半分こすれば借りれない金額ではない。契約はさくさくと進みついにカギを手に入れた。いざ運び込もうと二階から本を出す。すでに箱に入っている本はそのままよしよと動かしていく。裸のまま積まれている本はなんとなく仕分けする。

自宅に本があると、古本屋としての在庫と自分の持ち物としての本の境界が曖昧になるしかない。これは売り物のなのか、売つてはいけななのか。どこで線を引いているのか全くわからない。そんな曖昧な本の山を崩しているときどき思いがけない本が出てきて手が止まる。人にもらった本、後で読もうと思つて手をつけてなかった本はとくに。すでに読んだ本よりも、まだ読んでない

本。まだ読んでない本の中でも、これから読もうと思つてた本の方が目に止まるのはなんだろう。

山をかき分けて手が止まった本をとりあえず脇によけていくことにした。これは誰かがいいよつて教えてくれた本。こっちはどこかの本屋で進めてもらった本。新しい本も古い本も、どの本も誰かの痕跡がついている。痕跡はあるがどれも読んでいない。中身とは関係のない、痕跡。

積ん読、という言葉がある。積ん読も読書の一種やから、ともつぱら言い訳として使っている。どこかに返さなくてはいけないという期限もない、いつまでに読まなければという切迫した事情もない。とても贅沢な状態。

「本は積んだら終わりです」と恐ろしいことを言った人もいた。積まれた本がまた手元に戻ってくるには莫大な労力を必要とするらしい。ほんとにそうだよ。だがそんな一言で積ん読の山が減ることはない。きちんと棚にしまうことはない。段ボールに入れておくわけでもない。どこかへ売ってしまったら、人にあげたりすることもない。そのすべての中間くらいにある本。積ん読。

気がつくともた本の山ができていた。どの本にも痕跡がある。他人から教わることばかりだ。中身はわからない。もしかしたらこのまま読まずにいるのが正解なのではないか、と思い始めた。この山は大切にとつておこ

う。

結局 30 箱の本がでてきた。一箱に 50 冊として 1500 冊。この小さな部屋のどこにそんな本が入っていたんだろう。車体が沈んだクルマをしばらく杳然と眺めているとおとなりの遠藤さんが通りかかった。「すごい荷物やねえ」と笑う。いっしょになつてへらへら笑う。

八代日記 (一)

齊藤仁昭

(元長崎書店)

3月某日

熊本市の坪井から八代(やつし)市の松江町という所へ引越した。八代は同じ熊本県内ではあるがほとんど訪れたことはなく街の様子もまだ何も知らない。引越しは嫌いではないので楽しみではあるが、もう若くもないので面倒だなと思ふことも多い。そして新しい仕事を覚えねばならない憂鬱。スーツを着なければならぬ憂鬱…。20代の頃はそうした憂鬱に飲み込まれていたがもうおじさんなのでブルーを樂しむぞ。

3月7日

予定されていたライブが残念ながらコロナウイルスの影響により中止になってしまった。Moods と共演できるのを楽しみにしていたのに。悲しい。報道ではやたらとライブハウスが感染源だと言われているけど満員電車とどう違うのだろうか。電車ではみんな黙っているから違うのかな。

東京行きの切符は既に取っており、せつかくなのでライブ予定だった会場を借りてレコーディングすることにした。飛行機はいつもより乗客が少なめだったように感じたけれど山手線や中央線には結構人が乗っていた。自粛を要請などと言うわけのわからない日本語で指示されてもどう行動していいのかわからない。わからないうえに責任をこちらに押し付けている言動に腹が立つ。要請されたら「自」じゃない。

会場が早稲田だったために大学時代を懐かしもうと集合時間まで少し散策をしたが交差点にあった歴史ある蕎麦屋がファミリーマートになっていたり、通い詰めていた本屋はリニョールされ悲惨な内容の棚になっていたりしてげんなりしてしまう。これじゃあノスタルジーを追いかけているだけのおじさんとも言えるかもしれないそれじゃあいけないと気を取り直しサブウェイでサンドイッチを食べたがあまりおいしくもなかった。

会場入りし、いつもお世話になっている店員のフジカワさんにご挨拶。3月にキャンセルになったライブは我々を含めて2本だという。意外と少ない。ただ全く通常の活動ができていないライブハウスもあるようで悩ましい。

レンタル料をフジカワさんに支払い、セッティング。次のアルバム用にドラムを録れるだけ録ることにした。5時間くらいかけてなんとか一曲録れた。プロだとこんなの一時間かからないだろうなと思ったが無事に録れてよかった。

転職したばかりで仕事のスケジュールがどうなるかわからず翌8日の早朝に帰りの飛行機を取っていたので、いつもはメンバーの家に泊

めてもらうのだが、今回は羽田の近くにビジネスホテルを予約しておいた。宿の名前が「へんなホテル」で何が変なのかというと受付に恐竜と女性の人形が置いてあり彼らが Δ でチェックイン等を済ませてくれるというものだった。決まりきった受け答えしかならないまったく未来感のないAI。もうAIの開発とかしなくてもいいんじゃないだろうか。

3月某日

仕事の後、八代の街を自転車ですぐ散策。アーケードがあるのだが ∞ 割以上はシャッターが降りている。ひと気も少ない。皆家で飲むのだろうか。服屋や書店、古書店、レコード屋はリサーチしないと見つけれないかも知れない。職場の人に聞いたがりハーサルスタジオは無いらしい。練習できんじゃないか。町づくりしてる人たちとどうにかしてアクセスしたいが図書館やらも閉館中はどうにもこうにも。

3月某日

久しぶりに長崎次郎書店に赴き、レジ番手伝い。本屋つて、ほんとうにいい仕事だなとしみじみ思う。

日曜日には旅に出ようぜ

むくれるあの子をつれ出して旅に出よう

日曜日にはどこへ行くか

仕事のことなど忘れて旅に出よう

煙る道を通り抜けて

夜更かしどもにはまるで用はないのさ

お先に失礼

日曜日には旅に出ようぜ

狭い部屋を抜け出して旅に出よう

日曜日には山へ海への街へ

だけどああ天気は既に曇り空

まるで気にはしないのさ

日曜日には君と朝からふらふらするまではいい

暑いつらい足がつかれて棒のよう

煙る道を通り抜けて

夜更かしどもにはまるで用はないのさ

お先に失礼

日曜日にはどこへ行くか

狭い部屋を抜け出して君を連れて

(ケバブジョンズ)「My Sunday Gal」 作詞:杉浦真寛

シヴァ神の踊り ―時は存在するのか―

芝野 浩貴

(地球探検家)

福島白河市、長野木曾福島町、鳥取大山町が日本三大馬市だという。どの町も歩いたことはある。特に米子はよく通るので馬喰町を過ぎる度に馬を想う。映画「馬ありて」は、1トンのソリを引くばんえい競馬の競走馬を繁殖育成している農家、山中から伐採された木材を運び出す「地駄引き」を行なっている馬方など馬喰も含めて取材したドキュメンタリーである。笹谷遼平監督のミニ

トークショーでは、取材地の帯広や遠野について語られた。佐々木喜善のことやオシラサマの民話について。映画の推薦文を書いてくれた内山節と寺尾紗穂に感謝されていた。私とその映画を観たのも、鳥好きで本の執筆以外にも命に関係のある本の書評をしている音楽家の沙穂さんと、学校に招聘したこともあり教材にもよく使われていた上野村在住の哲学者内山節の名前をパンフレットで見ただからである。お会いした時の内山氏の「僕は3日先のことは考えない」という言葉が印象的で、里山時間を考える時いつも思いだす。改めて「時間についての12章」(内山節著)を手に取り再読してみた。時間

科学、時間文化論について書かれているわけではない。山川・海・森に流れる時間とそこで生活する人の佇まい。1993年の出版だが今読んでも色褪せない。笹谷監督は「馬の時間」を映すために敢えてモノクロで撮っていた。彼は3・11の震災後に撮影対象をサブカルチャーから命へと変えた。「時間についての12章」をよく読めば「牡蠣の時間」の例として、一昨年訪れた被災地の唐桑半島もとりあげられていた。「過去と他人は変えられない、変えられるのは自分と未来だ」とよく聞く一方で、ジョブズは「未来と結ぶ線などない、あるのは過去と結ぶ線だ」と言っていた。人間の解剖と猿の解剖の相互作用の順番によるずれが時間なのか。

「数学とは数と時間と空間を考えることだ」というのは私見だが、生徒への講義では時間論も毎年論じていた。対偶は元の命題と真偽を共にするが、時の概念を入れたり行為の対象を考慮すると偽にもなる。順時間の確率は動作の掛け算で進むが、原因を探る逆時間の確率ベイズの定理も存在する。因果関係と相関関係を混同してはいけない。幼い時の時間の進み方と歳を重ねた時の時間の進み方は違うのか？ 心理的時間。本川達雄の名著「ゾウの時間ネズミの時間」で問われる生物時間。仏教的円環時間とキリスト教的直線時間。田舎時間と時間の矢。ラ

イプニッツはニュートンに嫌悪感を示し、時間が存在しないことを支持するために自分の名前から t (時間) を除いたというが、脱ニュートン時間。更にライプニッツは、過去や未来は想像力の様式だと言ったスピノザを観念は魂ではないと批判した。無時間性を批判されてるのか無制限性(全時間性)を批判されているのか。記憶や知覚など心のあり方との連関で時間を考えたアウグスチヌスと物体の運動との連関で時間を考えたアリストテレスを融合して客観的時間を考えたカントも、時間は有限の精神で定住する概念と考えたヘーゲルも「時間は実在しない」と言っている。フッサールの知覚、把持、予期の3段階を踏まえて、過去・現在を保持し未来への投企を意味する本来的時間性を唱えるハイデッカーも、純粹持続からエラン・ヴィタルを唱えるベルグソンも、時間は人間の主体的在り方に関係する本質的存在としている。そのあたりは、マクタガードの時間分類で、時間経過が実在するA系列、実在しないB系列、順列はあるが方向はないC系列の関係として、A+C↓Bとなるのかの問題に着地する。時間の中で時間を超えろというのか？

ヒンズー教ではシヴァ神の宇宙の流れを支える踊りが時間の流れだという。二体問題ではニュートンは微分方程式を解くことに成功。三体問題はどうか？ オイラー解

で同一直線、ラグランジュ解で正三角形と簡単解にするならカオス・フラクタルは出てこない。シュレディンガー方程式が原子や分子構造を作り出しているように、初期条件や境界条件から遠ざかり、完全に振る舞う存在条件で宇宙の方程式は三角形と確率を結びつける。ここまですべて「時間は存在しない」が歩き始めると、量子的に振る舞う心得も必要となるだろう。是枝監督の万引き家族、ポン・ジユノ監督の Parasite、ケン・ローチ監督の家族を想うときのベースには「時間のエントロピー・時給のエントロピー」が流れる。年配の方には懐かしいだろう「ジャバダバダー」の流れるフランス映画「男と女」(ルルーシュ監督)の続編が53年の時を経て同じ2組の親子で再演された。虚の映画も実時間となるのでは？ サブタイトル「人生最良の日々」は、ヴィクトル・ユーゴーの「最良の日々はこの先の人生に訪れる」からの引用。ラストシーンはグリーンフラッシュだった。若さと老いが一つの流れとして繋がる。主演二人のアヌーク・エーメとジャン＝ルイ・トランティエニヤンは90歳前。デンマーク語でヒュッゲとは心地のいい時間や空間を意味する。ブルーストの「失われた時を求めて」では、紅茶(ワイン)に交じったマドレーヌ(パン)で回想は始まる。貴方にとつてのマドレーヌとは何ですか？

コロナ菌は新学期という時など知る由もない。

消えゆくお店

ムラカミヒロシ

（フライング・ブックマン）

近頃、しきりに困ることがある。

馴染みの店が、次々になくなっていくのである。

十数年前、突然かかりつけの病院がなくなった。文字通り、院長が急逝したのであった。二十年来世話になっていて、些細な不調や、風邪にしても頭が痛い、熱感が強い、肩が凝る…など、こちらの体に合わせた薬をその都度調合してくれる漢方の中医だったのだ。それが突如消えてしまったのだから途方に暮れた。

市内に他に中医はおらず、随分探した。何件かは、実際に掛かってもみた。みんなハズレ。数年かけて、やっと眼鏡に叶う医院を見つけた。開業後日の浅い所であったようだ。中医ではなかったが、診察が的確で、ピンポイントで処方して貰える。やれやれであった。

生まれる前から通っている理髪店の主人も、年来、健

康がすぐれない。二度の大手術を経験し、入院も数度、体に力が入らず、階段の上り下りも辛いという。

それでも、営業時間を短縮しながらも、仕事を続けているのは、古くからの馴染み客が来てくれるから、という。

全くの所、六十年世話になった散髪を、他の店に任せるのは、なかなか抵抗があることである。

店主の入院・療養が数か月に及んだ時、さすがに困って、他の理髪店を探した。旧市内を中心に数件あったが、どこも高齢の店主ばかりであったのに驚いた。若い人たちは、多分、カットハウスとか、ヘアサロンとか、あいった店にいるのだろう。

少しでも、若い店主の店が良いかな、と考えたが結局、老夫婦がやっている近くの店にした。大変丁寧で懇切な仕事とサービスのお店であった。しかし、今後二十年は難しいかな、とも思った。

つい先日、近所の写真館が、荷物の運び出しをしていた。シャッターがずっと閉まっていたので予感があったのだが、ここは、高校の卒業アルバムを撮ってくれた所で、その縁で、就職先の証明書用写真を撮ってもらった経緯がある。

料亭政治という言葉があるが、かつて、鳥取の町にもあちこちに料亭や小料理屋があった。学校や役所の近くには、必ずこういう店があった。職場の同僚などが小人数で集まって飲む時は、大抵、こういう所を使ったものだ。まとまった人数が入れる店となると、ホテルか温泉旅館くらいしかなかった。

酌をする女性が付き、興が乗れば三味線を弾いたりもする。お座敷遊びなども、幾つか教わった。

仕事で、他の市町村などに出かけた時も、大抵、御用達の料理屋があり、そういった店で接待があった。今は昔の話である。

ボタン屋というのは、大半の男には余り縁のない場所である。一生足を踏み入れることがない人間もいるに違いない。母親が、若い時分、洋装店務めをしており、家でも請負仕事をしていたので、時々、連れられて行くことがあった。間口が一間ほどの小さな店で、通常の商店とは一風変わった佇まいだった。左右の棚に、白いボール紙の小さな箱が無数に並んでいて、箱ごとに同じ柄の大小のボタンがひとつづつ留めてある。前用と袖用である。客は、端切れを持って行って、色柄とボタンを合わせながら選ぶのである。よく使っていた瓦町の店は、もう無くなっていた。

通りや路地から、どぶ板が消え、芥溜めがなくなり、タールを塗った電柱も、それどころかコンクリートの電柱さえなくなりつつある。

家から、縁側が消え、土間が消え、竈や風呂の焚き口がなくなった。

部屋の中からは、蚊帳が消え、火鉢が消え、同時に五徳や火箸、火起こし、鉄灸もなくなった。七輪、センバ（十能）、火バサミも見なくなって久しい。

炭はアウトドア・レジャーや一部の料理屋などで永らえているが、練炭、豆炭、炭団などは、風前の灯火だろ

う。
そう言えば、マッチというものもついぞ見なくなった。かつては、喫茶店や飲み屋に行けば、必ずその店のオリジナル・デザインのマッチが、持ち帰り自由でレジ横に置いてあったものだし（これを蒐めるコレクターもいた）、家の台所や焚き付け口には桃印（が正式の名称かどうかは知らぬ）の徳用マッチが備え付けてあったものだ。

二月の客、そしてコロナ

山本 千津子

(KOSHKA コーシカ)



一月にウラジオストックから観光で訪日していたロシア人家族との再会について「音信不通」43号に書かせてもらった。ちょうどその頃、二月にもウラジオストックから知人が来日すると連絡が、本人からではなく招待者である日本人からあった。待ち合わせの場所と時間がすでに指定されていて、当日は大阪の梅田まで出かけて行った。喫茶店ぐらい私たちが決めたかったが、それも叶わず、小一時間の再会を喜んだ。

この知人は十年ほど前に大阪でウイークリーマンションを借りて滞在していた時があった。一日ゆっくり一緒に過ごそうと彼女を訪ねて行ったが、駅から散歩がてらと彼女に従って向かった先は、スーパージョウであった。積もる話は露天風呂につかって、または寝転がって、シェ

イプアップのためにバブルやジェット、水風呂で冷やしてから季節の花の香りに包まれながら、半日近くも温泉に入った経験は、これまでの人生でこの日だけだ。高血圧の彼女の体調を気にしながら無事に上がってからは、施設内の食堂で昼食兼夕食をお腹いっぱいご馳走になった。今回の来日では日本人招待者に有馬温泉に連れて行ってもらえたそうだ。まだ新型コロナウィルスについてはクルーズ船や武漢での感染しかニュースになっていなかった。彼女が予定通りの滞在を終えて帰国した。

彼女と入れ替わるようにモスクワから三か月の滞在予定で来日した知人は、怪我をして三月に入ってすぐ帰国となった。航空券の変更は大変困難だったそうだが、不幸中の幸いと思うべきか、コロナ感染ではなく整形外科病棟に現在入院中だ。怪我をしなかったら日本にいたのだろうか？いつ、どのような判断をしたのだろうか？桜の頃に関西で会おうと約束していたが、叶わず。彼も温泉が好きだったが、ほぼ全身タトゥーのためにあきらめざるをおえない。数年前にグループで来日した時には、彼を残して友人たちを銭湯に連れて行った。肌色の湿布でタトゥーを隠したが、見つかって、というより入浴していた日本人が知らせたので、のんびりと待っていた私は呼び出され、ひどく怒られ、彼らは即浴場から出された。

きれいな花模様、鷲、蛇、見とれるばかりの芸術作品なのに。

新型コロナウイルスの感染状況を今ではすぐにネットやテレビで知ることができる。専門家は説明をしてくれるが、不安と関心は消えることなく、手の中のスマホで新たな情報を求めてしまう。一九九〇年代にウラジオストクに住んでいた頃、火薬庫が爆発したり、原子力潜水艦の解体工場で事故があったりしたが、テレビとラジオを通して、外に出るのを控えるようにとか、計測値では問題がないとか、言われた通り信じるしかなかった。すぐさま市民の生死に関わることはないし、まあこの国だからしょうがないか、どうするでもなく皆がパニックにもならない。それよりも店頭の商品がなかった食料不足の時の方が、人々は必死に口コミで情報を集め、走り回っていた。テレビで今日はどこどこのお店に何があります、なんて教えてくれないから。エネルギー不足で突然停電していた頃に比べて、地区ごとに停電時間が知らされるようになると、それに合わせて行動できるので助かった。ある時は赤い錆びた水が一週間以上も出ていたが、テレビに現れた白衣のおばさん（実際には衛生分野での肩書の偉い人）が「二、三度沸騰させて上澄みを飲めば大丈夫、健康に害はない」と言えば、そうなのか、

と信じるしかない。ミネラルウォーターも手に入らず、他に選択肢がなかった。そんなに沸騰させていたら細菌は死んでも鍋の水は減っていくばかり。

自分で判断することの難しき、自粛とは？ 考えさせられた。3月21日と22日は「鳥の劇場」で小中学生による「小鳥の学校」の発表公演があった。行くか行くまいか。行きたい気持ちはあるが、感染者の出ている姫路ナンバーで感染者ゼロの鳥取へ行くのは気が引ける。鳥取の人たちは私の思っているような目で見るだろうか？ まだ感染者の出ない岡山のナンバーだったら行ったか？ 迷わず行った。公共交通機関で行こうとはしないのか？ 自分の行動範囲内に感染者が出たら自分は感染してないと言い切れるのか、自問自答ばかりが続く。劇場側は観客数を200人から100人に減らし、私がぐずぐずしているうちにチケットは完売。当日券もない。兵庫県知事はこの三連休に不要不急の外出を自粛するよう要請し、私はそれに従ったことになる。私は気持ちでコロナに負けてしまった。でも「小鳥の学校」の子供たちは負けなかった。そしてこれからどんな困難に遭っても。

鳥取あれこれ その四十四

内田克彦

(地域研究家)

(承前)

吉田喜久代は、稲葉産業組合囑託職員の後、一九三六年五月から鳥取市方面事業後援会囑託職員に、一九三七年一月から三か月間は、その年四月に開設される鳥取県社会保健委員(保健婦のこと)養成所の講師に就くための研修を受け、鳥取県委託生として東京の中央社会事業協会に派遣されることになる。

この東京時代の一九三七年三月十四日の日曜日、山田わか先生宅で婦人問題を聞いた際に、市川房枝と出会い、「アッサリしたよいおばさん、一見、男を思はせる方」と、その印象を『砂丘の蔭』に記述しているのは興味深い。

実は、鳥取県社会保健委員養成所は『鳥取県史 近代第四卷社会篇』に記述するように、「昭和十二年に国民健康保険法が制定され、その実施に備えて」開設されたもので、「全国にさきがけてつくられたもの」なのである。

このため、高橋が『写真でみる日本近代看護の歴史』に、「農村保健婦の教育と設置に先べんをつけた山形県」と書くのは、一体どういう訳なのかわからない。

さて、高橋は一九四二年二月に山形県を辞職して帰京、四月全国協同組合保健協会に就職、結婚したが、一九四三年五月世田谷警察署に七〇日ばかり拘留され、不起訴のまま釈放されることになる。高橋は『いのちをみつめて』の中で「山形県における私の行動がめざましく、特別のイデオロギーでもなければあのようにには働けまい、特別の醜女でもなく体に欠陥もないのに若い女の身空でよく働いた」からと推測しており、同様に検挙されたのが幾人にもなることから、「せっかく軌道にのって急速に発展しつつあった全保協と産業組合の農村保健婦活動は挫折してしまいました」と記述している。

その後、東京を引き揚げ鳥取に戻るも鳥取大震災に遭遇、一九四五年二月に助産婦開業を目的としてその実習のため岡山時代での恩師を頼って山口県へ。一月に帰鳥。翌一九四六年離婚し前川姓に戻り、春鳥取市役所内の国民健康保険組合、保健施設に保健婦として勤務した。

この頃の高橋の動きは、先に参照した『鳥取県史』が

「革新的婦人団体」の項で紹介している。

昭和二十一年、戦後初の国際婦人デーを開催することになったが、地方では数少ない開催を鳥取で実現させたのも、「鳥取働く婦人の会」が生まれたのも彼女の働きだった。

翌一九四七年四月には、日本海新聞の編集部に転職した。理由として、次の二点を挙げている。

そのの主筆が戦死した兄と親しい人であったので、私たちが遺族を助ける思いと、戦後の新聞編集に女性が一人いてもという配慮があつたのではないのでしょうか。

その後、賃上げストライキ全面勝利を経て、組合専従書記、青年婦人部長に就いた。一九四九年一月に、前月にレッド・パージを受けた日野上中学校長の高橋清と再婚したが、翌年七月高橋自身も新聞放送関係のレッド・パージを受けた。その後、助産婦を開業するも、結局一九五五年三月に鳥取を離れて上京することになる。

ところで、兄の前川太郎は、一九四四年一月モルツカ諸島ハルマヘラ島トベロで戦死するまで、どのように

生きたのだろうか。彼の動きを『いのちをみつめて』と詳しく記述している『鳥取県史』により追ってみる。

前川・竹本〔節〕・安田〔憲〕らは、(一九三二年)八月一日の反戦デーを間近に、全農因幡地区反戦闘争委員会の名で、(略)ビラ四千枚を作成し、県内各地に配布する準備を整えた。

前川と竹本は摩尼寺でビラをまき、前川は警官にかすり傷を負わせたため、傷害罪で懲役半年の実刑を受けた。一九三三年九月頃に家出し、「島耕一」名で全国農民組合兵庫県連合会に所属し、最初、淡路島洲本津名郡中河原の小作争議に関わるなど、「淡路の農民運動の輝かしい指導者だったが、十一年(一九三六年)に父の死により帰郷」し、一九三八年二月結婚、二子をもうけて落ち着き、市農会に職を得る。一方、一九三七年の衆院選挙には社会大衆党に東方会の由谷義治への応援を涌島義博とともに依頼し、一九三九年二月鳥取県農民連盟を結成するなどしたが、三〇歳を越えた一九四二年二月応召。

なお、前川と鳥取一中卒業の同期に荒正人がいる。

ひそやかな声

～ビダーマイヤーの研

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

序

近頃、件の新型コロナウィルス騒動で、俄かに戒厳令の敷かれ、鎖国に復り個人の主権と自由の脅かされ窮屈な暮らしを強いられ、オリムピック特需に浮かれるどころではない令和2年3月の我が国。コレラやペストの流行は勿論だけでも、何かしら忘れてはゐなひか？さう考へて居て思ひ出した！

I

ビダーマイヤー時代のヴィーン、さうだ。
宰相メツテルニツヒの時代前後。

戒厳令が敷かれ、大規模な集会が制限され、民衆の声は封印、場所や人の行き来、外出も極端に制限され、あちこちに監視の目が光る。密告の奨励さるる厭な空気の底で。

人々は、『小市民』として、ささやかな家庭的・極めてプライベート的な悦びに内からの声を傾けた。明日をもしれなひ日々の中…。

其処から生まれた谷間の文化、小さな百合ビダーマイヤー様式。

文学・美術に幾人かの名が、然し…。

II

彼の名を外しては何も語れなひ、其の名はフランツ・シューベルト。彼こそは時代の息吹、其の研を後の世に、そして世界に伝へた唯一絶対の『ビダーマイヤーの寵児』。

III

幾つかの偶然が、さうさせたのだ、
彼に劇場での、オペラの決定的な成功、ロッシニの『理髪師』の如き、或ひはモーツアルトの『フィガロ』や『ジョヴァンニ』のやうなさうしてV.ヴェーバー『射手』のやうな大当たりが無かつた※事が。今日ビダーマイヤー時代の代表者たる彼の面影を一段と濃くするのは否めなひ。

単に興行的な成功ばかりで無く、観客に媚び、観せる為の見栄や所作、凡ゆるスペクタクルが排除され、其の劇的緊張は唯、内側へ内側へと向かつて行つた。封印された『ビダーマイヤーからの証言』は純粹な声として私達の魂に響いて来る…

IV

亦、幾つかの名歌（『野薔薇』『菩提樹』『鱒』『魔

王』『子守歌』等)の作家として以外、殆ど大きな成功もみなひ、まさに『陽の目を見なひまま』貧窮の中早くに没した後、ヴィーンを訪れ兄フェルディナントから数々のマヌスクリプト(草稿)を託され驚愕したRシューマンの奔走と尽力により、漸く交響楽、室内楽や、ピアノ曲等幅広い分野でのシューベルト・ルネサンスが興り、19世紀中期以降、俄かに大家の仲間入りした経緯(宮澤賢治以上の遅咲き)故もあらう。

兎に角ビダーマイヤーの時代、市井の片隅、孤独にひっそり生き、ごく親しい友人に私信として語られ、忘れられた楽の響き。その詩精神の純粹さ、ファンタジーの豊かさ、劇的世界の力強さ…

V

彼の名を決定的にした『魔王』、ピアノに伴奏を超へ管弦楽を彷彿とさせるドラマを物語らせ、歌い手には、少年と父親、死神と語り手四つの役を演じ分けさせる演出によつて歌曲の枠を楽々超へた傑作バラードに仕立てた。何より生と死、其の境界線は危く臆気であちらと此方の世界を行来する足取もはや幻のやう、ただし両者を追う筆致は、見てきたやうに生々しく瑞々しひ。何といふロマンティック!

2020 03. 16

※シューベルトに劇作品は無い訳では無い。『フィエラブラス』(1823)等のオペラ、『キプロスの女王ローザムンデ』(劇付随音楽)同年等。いずれも存命中は全く知られず、後年に至っても興行的に大ヒットしたと云へるものは無い。

『今回の四枚』

- ① Fr. p. シューベルト pf ソナタ 変ホ長調 D960 C. ハ
スキル pf. 1951
- ② 同 幻想曲(短調) D940
エミール&エレナ・ギレリス pf 連弾
- ③ 同 ソナタイ短調『アルペジオーネ』 E. マイナル
デイ vc&GA. ボルチアーニ pf. 1950
- ④ 同 『岩の上の羊飼ひ』 D965 R. ゼルキン pf. H. ラ
イト cl. r. B. ヴァレンテ sop. 1960



読むという旅

古賀 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

「このところ、「書く」ということばかりに拘泥しているの
で、読まれる方もさぞ閉口しておられるんじゃないだろうか、
か、と思っていたところ、見透かされたように、たまには「読
む」ことについて書けば、と奈良さんにご提言頂く。

五月に「本のある暮らしを考える」というトピックで講
演をされるので、そのヒントともしたい、とのこと。

「本のない暮らし」という視点で考えた場合、僕の場合、こ
れは相当の決意無くしてできる断言ではないが、きつぱり
と、「酒のない暮らし」や「女のない暮らし」より、更に堪え難
い、と申し上げたい。

「食料のない暮らし」との二択であれば、流石に食料を選
ばずを得ないかもしれない。

本がこの世から消え失せたらどうするか？

恐らく自分で書く(書くこと)については書かないんじゃない
か？

それは、書く、ということは、極言すれば、今までに読ん
だものの切り貼りであるからである。読みたい話、を自分で
書こうとすると、畢竟、貴種流離譚や復讐譚、などと今ま
でに自分が読んで来た好みの元型・枠に行き当たると。

本来なら貴い身分であるべき主人公に、どのように卑俗
な体験をさせるか、というとき、「下賤・陋劣体験」という
抽出しを持ち合わせており、さつと開け、SMまがいのこと
を書き散らかし、ホウ、こういう屈辱は新鮮だね、と感心
させるくらいが伎倆といえれば伎倆かもしれないが、所詮、純
粋な意味での「創作」、などというものはあり得ないのであ
る。

しかし時々、何でこんなモノが自分の中から出て来たんだ
ろう、と思うようなモノが出て来ちゃうことがある、ま、こ
れについては何度も書いたので繰り返さないが、そういう状
況に於いて、なんである。集合的無意識、つてあるのかもし
れないな、と感ずるのは。

沈んでいる、今生きている人間より、何万、何十万倍もの
数の死者達が、時代、時代で読み継いで来た物語の元型を
釣り上げてしまうのかもしれない。

そしてこういうものを釣り上げるコツのようなものがある
ことに、最近うつすらと気付いて来たのだが、これも伎倆の
うちかもしれない。

本については、本誌に過去二回ほど旅に持参する書物について書いたと思う。

拘泥というか、書くことに中毒すると、苦しいのは書くこと自体より、書くことと書くことの間(はざま)にある。

つまり、ある期間集中して書いていた小説なりを一応書き上げ、次に書き始めるまでの空白期。この枯渴状態が長引くと、焦燥に駆られたり、引いては自分の存在意義をも疑ぐり始める始末。

この状況を打ちやるのに有効な方法がふたつある。

旅と読書。

前者は母に先立たれた父を訪ね、従来と比べて長い期間、帰国することや、家内とちよつと普通じゃない場所(マダガスカル、ボルネオ、等)を訪れる機会が増えたことで気付いた。

そして後者との間に近似性があることも。

まず、日常からの遊離、異界への耽溺、という点で共通する。

過剰さにカタルシスの深度も比例するので、旅であれば、博多よりマダガスカルの方が日常を粉碎する。

読みものに例えれば、旅という(いや、あらゆる)物語元型の準拠枠は大同小異だが(所詮、純粹創作などというモノはない)、博多はチマチマとした私小説で、マダガスカルの場合、

合、熱帯雨林の植生、陸続きの頃、インドネシアから渡って来た、人、動物、文化と抽出しが潤沢で、抽出しの中身も奇抜である。

こんなもの見たことない。終わつて欲しくない。

しかし、終わつたら、元来た日常に戻らなければならいところも同じ。

そして本当に卓抜した体験であれば、戻った後、日常が少し異なつて見えるところも。



獨創性、というものがあるとして、小手先の抽出しの数の多さと、開いてみせる手先の鮮やかさにのみ潜む、物語、そして旅の同工異曲性だが、本を読まない者も、旅をしない者も、限なく平等に、無力感に押し潰されながら、その前代未聞の圧倒的浸潤力を目撃している疫病。

それは間違いなく我々の集合的無意識(など)というものがあるとして……に沈潜していくに相違ない。

ある日、何者かによつて、手垢のついてない物語の元型として釣り上げられるときまで。

マリアージュ

あきの素生

(くうねるめがね)



柳宗理の清酒グラスを、不注意で割ってしまった。二年前だったか、まち歩きをしていて偶々見つけたものだ。小さなカップに、太めのどっしりとした足が付いている。つるんとした透明のガラスでできていて、装飾はなく、とてもシンプルなのだが、なんだかわいらしいなど思いい、お財布を開いた。実際に使ってみると、口当たりがよく、手になじむ。カップの部分のガラスは薄く、でも繊細過ぎず、安心して日常使いできる。さらによかったのは、日本酒でもワインでも、これ一杯だけなら次の日に響かないところ。といって少なすぎることもなく、気に入って買ったものなので、使うと満足感がある。私にとつての「神グラス」だ。それだけに、割ってしまったあとの「ロス」が大きく、すぐに二代目を手に入れた。

ここ数年、器を見るのが楽しくなってきた。鳥取に来て、民芸にふれる機会が増えたことも、理由のひとつだと思う。すでに使っている食器類があるので、そうそう買ったりはしないのだが、手に取るのが好きだ。お椀、

湯呑み、マグカップ、フリーカップ。特にまるいお椀を手で包んでいると癒される。それぞれまったく違う手触りや重さ・軽さ、これは、というものに出会うと、じつと捧げ持っているので、不審に思われる向きもあるかもしれない。

お猪口も試してみる。小さいからか、これは、というものに出会うのは難しい。

お酒は好きだ。といって、毎日飲むわけではなく、一応、休みの前の日だけという(ゆるい)禁を設けている。年々、嗜む程度、が身についてきたように思う。酒器はあまり持っていない。先に書いたグラスと、津軽びいどろの徳利、盃、以前酒蔵のイベントでもらった、底にスマイルマークの描かれたお猪口。季節や気分で酒器を変えなんて楽しみ方もしてみたいものだ。お猪口は場所を取らないので、少しずつ集めるのもよいかもかもしれない。

冬になると、鯉が魚売り場に並ぶのを心待ちにしている。鯉の煮付けが好物になったのは、こちらに来てからだ。お店で一度食べてから、すっかりはまってしまった。魚料理は苦手。普段は焼くか、刺身を買ってくるかのどちらかくらいだが、鯉は別。食べたい一心で、この冬もせっせと煮付けた。醤油と酒、みりん、砂糖、しょうがの薄切りを鍋で煮立たせ、鯉を入れて、落とし蓋をする。

数分経ったら、煮汁をかけかけ、火が通るのを待つ。分量を計らないし、なんとなくの手順で作るので、味が違ったり身が崩れたりではデフォルトだ。

そんな煮付けだが、正月に手に入れて、ちびりちびりと飲んでいた日本酒のあてに、とつついて驚いた。合う。煮付けもお酒もどちらも旨い。自分の料理を称えているわけではない。先ほど述べたように、適当料理で身もぼろぼろである。でも合う。

肴選びに失敗することは、ままある。肉には赤ワイン、魚介には白ワインみたいな、どこで聞き知ったかもはやわからない乱暴な知識だけ持って、でもそれすら守らず飲んだり食べたりしていると、単品で食べればおいしい食材が、生臭く感じられたりする。お酒が不味くなることもある。

それだけに、日本酒と鰯の相性のよさには、ちよつとした感動を覚えた。これが世にいう「マリアージュ」というやつか。日本酒は、鰯の煮付けを食べるために作られたのか、とも。

あの感動をもう一度味わいたい、と、あまり時期を空けず、また鰯の煮付けを作った。日本酒も、違う酒蔵のものだが買ってきた。鰯をお皿に盛りつけて、神グラスにお酒を注いで、いざ、と食べ始めたが、一向にマリアージュはやってこない。あれ、とか、おかしいな、と

か、そんなはずは、とか思っているうちに、すべて平らげてしまった。

繊細でない私の舌が、おいしいと感じる基準はさして厳しくないはずだが、違うお酒と再現できない適当料理で得られるほど、マリアージュは甘くなかった。翻せば、前回の組み合わせは奇跡的だったということか。ぜひまた体験したいものだ。

先日、ちびりちびりと読んでいた町田康の『しらふで生きる』（幻冬舎、二〇一九）を読了した。三〇年間毎日飲み続けたという氏が、なぜ酒をやめるに至ったか、その方法や効果を記している。この本から得たノウハウは、今しばらく寝かせておこうと思う。

イラスト あきの素生



黒ときどき青赤



ドラメリア (座敷わらし)

この春、職場を替わることになった。異動はつきものの仕事なので、それ自体は「ああそうなんだ」としみじみしながらも、粛々と受け入れる。立つ鳥跡を濁さぬために残務整理がひと苦労ではあったが、古巣ではあるし、土日のある生活に戻る気安さもあった。

ただ、困ったことがある。実家方面からある攻撃をかわせなくなるからだ。

ひとつが、「正月は帰ってきてゆっくりしろ」攻撃。こちらは、年末年始の本の回収当番に誰よりも早く立候補することで対処した。この五年間様々な気遣いも辞退してその役を譲らず、目論見どおり大晦日夕方の帰省に成功している。

もうひとつが、「LINEをはじめろ。テレビ電話で会話しよう」攻撃。何が嬉しくて、実家とテレビ電話をせねばならないのか。電話やメールのいいところは顔が見えないところなのに。こちらは、「LINEを始める

と職場から四六時中連絡が来て、気が休まらないから嫌だ」と出まかせを並べて頑なに拒んできた。ちなみに、土日の突然の来襲予告も「今週末は仕事である」と断りつけている。

それやこれやで、実家の人々はわたしの職場を超絶ブラックなけしからんところだと思いついでいる。県外へ帰省する人間を大晦日までこき使い、SNSを使って貴重なプライベートの時間を侵食する。そして、週末はいつも仕事。完全に故意ではあるが、いわれなき悪印象を与えてしまったことはまことに心苦しく思っている。

さて、今度からどう理由をつけようか。シフト勤務から、暦どおりにブラックときどきブルー(とレッド)の生活で。



・編集後記:

袋川沿いの桜が咲き始め、春が来ました。出会いと別れの季節ですね。わたしも現在の職場を離れて、新しいスタートです。

ドラメリア (編集長)

「マルチ通訳機」を購入。オフラインでも3カ国語の通訳ができる。努力しないで一定の結果が出せる。「ミニコミ魂」と無関係ではない、という気がするけど…。はて？

奈良敏行 (発行人)